

氏名・（本籍地）	舎奈田智宏（東京都）
学位の種類	博士（仏教学）
学位記の番号	甲第58号
学位授与の日付	平成21年3月16日
学位論文題目	永観とその往生思想の研究
論文審査委員	主査 平井 宥 慶
	副査 小 峰 彌 彦
	副査 松 崎 恵 水

舎奈田 智 宏 氏 学位請求論文審査報告書

「永観とその往生思想の研究」

論文の内容の要旨

本論は、序論と結論にはさんで、四章立てとなっている。

序論で、この研究の目的と方法について述べ、これまでの永観研究の動向を、その生涯と歴史的位置づけ、かつ永観の念仏行について論ず。

従来の永観像は、これまでの研究史を訪ねるに、南都三論宗僧として、法然の浄土宗確立以前の、せいぜい、それに先行する浄土往生信仰者という位置づけにあった。これに対し本論者は、永観の念仏行における「真言密教の影響」と、彼の思想における『大乘起信論』の影を追うことで、新たな永観像を描こうとするものである。これらはこれまでの研究においても、ある程度指摘されていたものだが、本論者は、これらを強調して、永観研究に新たな道をひらこうとしている。

第一章「永観の生涯——特に真言僧として——」は五節からなり、第一節永観（1033－1111）の生涯では、基本的な伝記資料と彼の著作目録の整理をし、前期と後期に分けて論述す。前期は禅林寺→東大寺・東南院→光明山寺、後期は四十歳で禅林寺に戻り、東南院を建立して禅念止住す。その間、東大寺別当に押されたり、各方からの要望が多く、世間から宿望されていた存在であったという。この念仏一念という過程のなかで、教誨師の社会活動とか、真言密教との繋がりがみえてくる。

第二節はその真言密教の影響、第三節ではその社会事業的行動の側面を探索。

第四節は『往生拾因』教信沙彌説話引用について論ず。『往生拾因』は永観の主著、教信沙彌説話は在家人教信の念仏宣揚説話で、親鸞が共鳴したと伝えられるのだが、永観はこの話の後半に登場する僧侶の勝如に注目した。永観は出家者、ここに勝如をみる心情があったとみる。勝如は利他行に精を出す、ここにも影響されたかも知れぬ、と。永観の念仏は自己の安寧に限られたものではなく、弥陀の救いを他者に広めるものであった、という。これはのちの親鸞などへの影響、大なるものがあったというのである。

第二章「永観における真言密教の影響」は八節から成り、主として彼の主著『往生拾因』の往生思想を中心にしつつ検討を進める。

第一節は「滅罪」について、「事と理の懺悔」を言う。事は五体投地・発露涕泣、理は自性空の観を為すこと、そして末法の世の滅罪が称名念仏である。ここに密教の影響がみられ、「阿字本不生」を思わせる語彙の登場、覺鑊の代受苦思想に通ずる考え方がみられる。また陀羅尼を称えて滅罪往生、というのものもあるのは、やはり真言的といえよう。

第二節は菩提心の問題、これは従来『往生講式』により「願生心・厭離心」と定義されたが、『往生拾因』によるとき「真実発菩提心」の語彙によって表記されるもの、これは密教の影響による「衆生本有の淨菩提心」すなわち如来蔵とみられる。そのとき、阿字観乃至月輪観の実践は重要である。

第三節は法身観の問題を論ず。『往生拾因』では、一心に称名念仏し法身が同体、と観じて往生することが述べられている。その内容は、如来自性清淨本覺法身、本覺というところから、衆生本有の如来蔵、となる。これは『大乘起信論』からの影響、とみる。この法身と仏身が同体、ということになる。

第四節は、法身以外の仏身観について検討する。これは換言するに永観の淨土観ともいえる。永観は、極樂淨土は娑婆世界に最も近いと考えていた、これから、報身としての阿弥陀如来、という見方が読み取れ、これと法身の弥陀と、二つながらあった如く（ことに後者が重点に置かれる如く）である、という。第五節は、法身同体論の真言密教の影響問題を論ず。結論的には、ここはむしろ『大乘起信論』からの影響を指摘すべきで、敢えて真言密教の重要度を言う必要はないといっている。第六節は、三論教学との関係を検討する。ここで三論教学とは「一切空思想」をいう。永観は三論僧、といいつつ、彼の引用において、三論系論書ではないものから引用してこの思想を説く場合が少なくなく、そういう意味で通仏教的であるという。第七節は、臨終行儀について。かれは病人をみれば必ず救療を施し、病人の介護をしつつ臨終の行儀をする、という方法であった。これは今に言うターミナルケアといえよう、と。第八節は、往生思想と陀羅尼読誦の問題について。永観は称名念仏を為すと同じくらいに陀羅尼読誦も実習し、彼にとってのその優劣差異は認めにくいという。

第三章「永観の往生思想における二面性」は、四節から成る。

第一節は、彼の思想における『大乘起信論』の影響の多大であることについて。影響の有無は此れまでも指摘されてはいたが、それを更に強調したい、というのが当論の趣旨である。

第二節は、難行・易行の問題、鎌倉期の念仏門から言えば、真言行は皆難行、それを永観に真言密教の影響有りと思えるときどうなるか、ということが問題である。永観は、三昧を発得し法身同体を感じ得る行は易行と考えていた。だから彼は真言行を即身成仏のためではなく、往生のために為していた、という。

第三節では、改めて永観の念仏行なるものを問う。前に三昧発得の行に言及したが、それでは三昧発得しないものの称名念仏行は極樂往生できないのか、という疑問である。そこで論者は永観が多用する「一心」の語に着目し、その意味に三昧発得法身同体を得る一心と、散心のままに念仏に集中する一心がある、と規定する。前者は観想念仏を昇華させた三業相應の称名念仏、三業相應で往生が可能、とみていた如くである。猶この二面性は、永観が社会事業に精を出していた人生と無縁でなく、自ら念仏行者たる一人の存在と、社会で見聞きする多様な民衆の現実をみる自分、という構図がそうさせた、とみている。

そこで第四節では機根について問題にする。元來念仏門の世界では機根は問題にされない。問題にするのは所謂通仏教世界であり、永観も決めて論じてはいない。これは換言すれば衆生観とでも言うべきもので、閉塞状態の時代の中で彼は多岐に渡る機根に触れた。時代は末法、成仏不可能という無常観と厭世観に彩られていた。彼は衆生の機根を二種に分け、称名念仏によって三昧発得出来るものと出来ないものである。それでも両者往生が許されるとするなら、衆生に如来蔵ありと法身を何とか認める衆生観をとる以

外に無い、となる。いずれにしても、永観には多様な人びととの交流、が特徴的に認められる、としている。

第四章は『往生拾因見聞』の翻刻である。この『往生拾因見聞』とは『往生拾因』注釈のひとつで、聖聡（1366－1440）による、とされている。ただし学界の一部では、聖聡の師・聖岡上人撰述説もある。全部で四十一丁ある。

この疏は『往生拾因』の数ある疏のなか、古くから三番目に位置する。そこでこの翻刻は、大正大学所蔵本を底本に、龍谷大学本を対校本とす。ともに宝永二年（1705）版本であるが、書き込みなどに差異がある。『往生拾因』の最初の注釈は、了慧（1243－1330）の『往生拾因私記』であるが、当『往生拾因見聞』は、この『往生拾因私記』の要略版的のもので、そういうなかでも、若干に独自性も見られる。浄土宗としての入門書性格が基本である、という。

ただし、もう一つの留意点は、永観の念仏行には、二つの面が併存しているということである。それは対聴者の相違を本人が認識し、一つは在家諸士に対する説示、一つは出家修行団に対する説示、である。称名念仏がそのまま通用してしかるべき、とするのは、その前者であって、あえて言うと、ここが特化したのが鎌倉仏教かとも見えるのだが、こういう考察検討も、してほしかったかなと思考する。

最終章の結論は、「各章概要」を述べ、「総括的結論」を掲げている。総括的結論では、永観が「真言宗の僧侶」であることと「真言密教の影響」を確定的に指摘している。

最後の最後に、目次には無い「今後の課題」が述べられ、未成熟な往生信奉者という評価をはずし、多方面からの多極的考察と、『往生拾因見聞』の翻刻を踏まえた考察、更には近時発見された『三時念仏観門式』の検討を約す。「多方面」のなかには、思想的面ばかりでなく、教誨師的活躍の側面も考慮に入れるべき、という。

なお、末尾には「参考文献」目録と「あとがき・謝辞」が付け加えられている。

審査結果の要旨

本論文の最も根本的な課題は、永観という11－12世紀前半に生きた念仏行者の、その往生思想の再吟味にある。

永観という人物は、それなりに従来一定の評価が下されている。彼の時代は平安時代後期、いわゆる院政期にかかる、社会の変動が目に見えてあらわれだした変革期の始まる頃であった。時代の閉塞感が、仏教的には末法到来というかたちで、人びとの不安な心の俎上にのりだし、激動する時代のうねりの予兆がそこここに見え始めていた。これが大きなうねりとなって、十二世紀末の武家政権の成立となっていく。

仏教信仰の世界でも、前述した末法の世という認識がこの世での救済に絶望感を抱かせ、そこからどこぞの浄土に往生したいという信仰が勢いを増して、阿弥陀仏の西方極楽浄土往生信仰が、飛躍的に拡大していったのがこの時期であった。そして、その確立が鎌倉仏教、法然・親鸞の念仏門とすれば、そこに至る永観の時代のそれは、その過渡期的扱い（あまり重きを置かれない）を受けるのが今までであった。過渡期的扱いとは、教学的物言いから言うと、往生思想の不徹底、ということになる。即ち永観は、東大寺に入寺しての機縁で三論宗僧として称名念仏を称揚した、まだ未成熟の念仏宗徒であった、ということになる。

しからばその念仏行の徹底とは、それは法然・親鸞の他力念仏、阿弥陀仏への完全依存を徹底することである。ひたすら阿弥陀仏の御名を称へてその救済を待つ、これは上下限ることなく誰でもが実践可能であり、称える人の素行を問わないから易行である。

従来、こういう鎌倉念仏教の概念によって永観も研究され（平安中期以降の仏教も研究され）、彼の歴史的 위치が決定されていた。それでいいのか、ということ、彼の前に、源信がいる。つまりこれまで「源信と法然の間に位置する東大寺三論宗の浄土往生信仰者」として描かれた永観の、「それ以外の視点からの」研究、それを目指して本研究は進められているのである。

その考察のために具体的な課題として、「滅罪」「菩提心」「法身同体」「臨終行儀」「難行・易行」等の項目が挙げられ、永観の称名念仏の中身が検討されている。言うまでもなく、彼における三論教学の持つ意味も検討されている。

結論的にいえば、本論者は、ひとつに、永観に真言密教の思想の影響をみる。これは彼が東大寺東南院に住した縁故を出発として、ここが真言・三論双修の道場であり、永観の出自にこれは軽くない事実と受け止めるのである。この点は、これまでの先行研究においても指摘はされていたが、本論者は重い事実と認定しその影響を強く主張する。そして前記各項目の検討に、そういう眼を以て見ていくことになる。「滅罪」然り、「菩提心」然り、その他云々、である。そしてこれは、念仏と陀羅尼の関係は如何、とか、派生する課題も少なくない。

真言密教の思想の影響、といえば、そもそも“真言僧”とはどういうものを考えているか、という課題がある。それから本論者がよく言う「通仏教」という言い方もある。これは具体的にどういう仏教を言うか、これも課題である。三論仏教そのものが通仏教、といえば、彼が通仏教を言うのは当然、ということになる。本論者の、これからの課題としては、こういう問題の掘り起こしである。片鱗を見せているから、これから研究をさらに深めなければならないであろう。

その各項における論述の仕方は、資料を丹念に引用しつつ論の展開を進める方法において、学術論文としておおむね妥当とみた。その注釈指示についても、極めて丹念な注記に、論文としての要件を十分に揃えていると認められる。

二つ目の主張は、永観の往生思想における『大乘起信論』の影響である。これもこれまでの研究になかったわけではないが、あきらかに影響あり、と明瞭に指摘するのは、本論者である。この影響ということは、如来蔵思想との問題でもある。これは念仏行者の機根にかかわる易行・難行の問題につながり、永観の往生思想における二面性の問題に及ぶこととなる。以上様々な問題にかかわる課題を網羅し、かつこれまでの研究議論に果敢に挑戦し、一所懸命に追究していく姿勢は、研究者として真に好ましいものと心得る。

前の内容要旨の項でも言及したが、永観の二面性、という課題は、彼の評価を決定する要目となるので、肝要な一事である。つまり、平安の時代的文化は平安時代の概念で把握する、ということが求められてしかるべきであるということだ。鎌倉仏教的世界観で平安時代を裁断するのは、如何なものかということである。この二面性に気づいたことは、まことに慧眼というべきである。

なお研究上若干の欲を言わせてもらおうと、「滅罪」以下の課題は、鎌倉期の念仏門においては、基本的に否定される傾向にあった問題である。例えば、念仏行が易行なのは機根を問わず可能であるからで、その時菩提心も問わない、ごとき教えとして広まった部分があった。おかげで、明恵との過激な論争がやり取りされたことは周知のところである。

親鸞に至っては、もはや救われてしまっているから、念仏も感謝するときの意味となり、滅罪も無くなる、となる。こういう往生観を克服（乃至否定）して永観像構築（あるいはこれまでの研究定説を翻して、新たな研究世界を構築すること）は、本論者にとって、まだまだこれからの課題のように見受けられた。それは本論者なれば、必ずやこれからも続けられるであろうと信じ、その研究の進展を期待するば

かりである。

中国念仏教・道綽との関連性、覚鑿との関係、などもこれからの課題である。本論者自身、この方面の研究が大事であることは十分に認識している如くであり、この方面の研究は、平安時代後期全般に及ぶ成果の期待されるところで、更なる研鑽が求められ、大いなる結果が期待されるところである。

一読者としては、以上のような希望はあるが、これは課程博士論文としては瑕疵となるほどのものではない。これまで述べ来ったごとく、課題となるべき問題点の列举と考察において、過不足ないものと認められ、研究上本論者の今後の発展も期待される点において、課程博士論文として認定できるものと思う。

以上、合格を以て、審査結果報告を終わるものとする。